

クチベニツキガイ移殖適地調査

1. 趣 旨

カブラツキガイ科のクチベニツキガイ *Codakia punctata* (Linne) は宮古の久松に多数生棲しているので本島内にこれを移殖すべく地域を検討していたところが勝連半島と平安座との間にある通称ウラムドウと呼ばれている砂礫地帯は面積が約 4 K² あり、然も戦前にはそこに生棲していて周辺の住民の食膳に上り賞味されていたとの事で平安座及び藪地島周辺のウラムドウを調査することにした。

2. 期 間 1958年12月19日より同月21日の2泊3日間

3. 方 法

調査員は熊手を使いクチベニツキガイの発見に努めるとともに別図に示す如く平安座島及び藪地島を基点にして出来得る限りの踏査をした、干潮の為第2観測点のみより plankton を採集した。

結 果

(イ) 平安座周辺

平安座島周辺のウラムドウは全般的に砂礫に幾分泥が混り処々に砂丘が形成され又岩面が僅かに露出している。

平安座部落近くは砂泥礫混着であるが其の外方は前述の通りである。

干潮による潮汐の流動も大きく、一帯が浅所があるため台風時には直接外洋から来る波浪の影響を受け海底の変動が考えられる。処々に砂丘が形成されているのは外洋と金武湾間の潮及び波浪の為と考えられる。

砂は 1.5 乃至 2 係位平均の粗砂で貝殻の細片、珊瑚礁、山石等から成り、白色、黒色、淡茶色の三色が混り、底質は一般に稍々硬めである。一帯は砂地のために藻類は少く、緑や、貝殻にカサノリやイソスギナーガ着生しているのみで他の藻類は見受けられなかつた。

貝類には二枚貝としては、タイラギ、ウラツキガイ、リュウキュウザルガイ、カワラガイ、イナミガイ類、リュウキュウシラトリ、リュウキュウマスオ、チヨオセンハマグリ、リュウキュウアユヤ、ナデシコガイ等である。巻貝としてはタカラガイ類、イモガイ類である。

クチベニツキガイの死貝を散見するので生貝の採取に努めたが、採取する

事が出来なかつた。

死貝の中に穿穴の跡を見るが害敵の存在は認めるが、発見は出来なかつた。

滞潮時 ネットを曳いて を採取し本所に於いて鏡検した結果別紙の通りのを見たが全般に 量が少く、其中特に硅藻類が少くコペポータ(機脚類)が最も多い。

同時に水温観測の結果は摂氏 2 0.5 度で比重は 2 4.3 9 (換算済)であつた。

(ロ) 蔽地島地先

西岸及南岸は深く常に滞水しており不適と思はれるので北岸及東岸を見る事にした。

底質は殆んどウラムドウと同質であるが蔽地島岸は波浪に寄せられた砂で泥分を幾らか含んだ白砂である。

東岸、北岸は太洋の直接の影響が少いと思はれたが実際は金武湾の影響を受け不連続砂丘が岸近くに出来死貝も多い処から波浪による海底の変動も大きいと思はれる。

筈も前述の通り矢張り少く硅藻類は最も少い。

潮汐の流動も前述同様干満により大きく停滞する事はない。

2 1 日の観測による水温は 2 0.0 度 (摂氏) 比重 2 4.3 7 (換算済)であつた。

(ハ) プラクトンの種類

Rhincalanus cornutus
Cheatoceras convoltus Castr
Cheatoceras compressus Laudar
Rhizosolenia hebetata
Ceratium Pulchellum Schroder
Tintinnopsis subacuta Jorgensen
Paracalanus Prarvus Claus
Candacia armata Boeck
Oncaea venusta Philippi
Stylocheiron carinatum G,O,Sars

Lucifer raynaudi Bata
 Nitzschia longissima (grum)
 Nauplius of copepoda
 Megalopa larva of Brachyura

結 論

底質は砂礫に幾分泥を含みクチベニツキガイの生棲地である宮古の久松とは大いに違う。風波の激しい時や干汐時には底質部が攪乱され地形が相当変化する。それに貝類餌料と謂われる硅藻類やクリプトモナス類が少い。クチベニツキガイの死貝はみつかったが、生貝が見当らなかつた。最近平安座、屋敷名間の運送事業が盛んになり、トラックの往復も多く其の外徒歩も多く移殖後の管理が非常に難かしい。

以上の諸点よりクチベニツキガイの移殖地としては不適である。

クチベニツキガイ移殖適地調査

